

現地を訪問して想うこと

平下 光 (2010・院 MOT)

東日本大震災から早3年半。関西在住ということもあり、これまでは同じ日本という国で生活しているにも関わらず、どこか他人事のように感じていました。しかし、同じ国、同じ時代に生きている者として、それではいけない、少なくとも一度、自分自身の眼で被災地を見てみようと思い、今回このツアーに参加させて頂きました。

初日に石巻市、女川町の視察がありました。被災から3年半経った石巻市の被災地を見て、率直に感じたことは、辺り一面何にもないということでした。家もない、お店もない、人もいない、震災直後は街全体が瓦礫の山という映像がよく流れていましたが、今はその瓦礫も残っておらず、建物の土台部分が一部残っているのみでした。被災前の石巻を知らない私にとって、数年前まで、この場所に多くの建物が建ち並び、多くの人が生活していたとは、とても想像できないような光景が広がっていました。瓦礫の大部分は撤去されていましたが、逆に無の状態からの方が元の活気ある街への道は遠く感じてしまいました。

女川町でも同様に街全体を覆っていた瓦礫の山はほとんどなくなっていました。市街地に進んでいくと4階建て位のコンクリートのビルが痛々しく横たわったままになっている姿が目に入ってきました。コンクリート造りで、これだけの高さのビルの屋上に避難すれば、間違いなく助かると思いそうですが、自然の力はいとも簡単に人間の想像を超えてしまうもので、倒れてしまっているということはこの屋上に避難した人も津波に飲み込まれてしまったのだらうと思うといたたまれなくなりました。

被災地では生活を取り戻そうとされているかとは思いますが、復興にはまだまだ多くの時間がかかると思います。こうした中で私たちは被災地の為に一体何ができるだろうと考えました。

震災当時は多くの方が被災地のことを心配し、気にかけていたのに、最近では震災に関する報道などもめっきり減ってしまい、もはや過去のことのように思っている人も少なくないと思います。しかし、被災地の方々にとっては過去のことではなく、今現在も復興に向けて前向きに進んでいる最中なのです。直接の被害を受けていない我々が出来ることは、ボランティアに参加するなど、直接復興支援に関わることも一つの手段ですが、全員がそれを実行できるわけではありません。復興に向けて前進している被災地の方々の為に少なくともまず出来ることは、この現実を知ることだと思います。そしてこの現実を知った人は、周りに発信する必要があると思います。これだけ多くの被害をもたらした東日本大震災という未曾有の大災害を過去のものとして、決して風化させてはいけません。誰でも出来る支援、皆さん被災地の現実を知り、発信していきましょう。